

科学研究費補助金（基盤研究（S））研究進捗評価

課題番号	19103003	研究期間	平成19年度～平成23年度
研究課題名	言語情報伝達における連続性と分節性：知覚心理学，言語学，音声科学の融合	研究代表者 (所属・職)	中島 祥好（九州大学・大学院芸術工学研究院・教授）

【平成22年度 研究進捗評価結果】

評価	評価基準
	A+ 当初目標を超える研究の進展があり、期待以上の成果が見込まれる
○	A 当初目標に向けて順調に研究が進展しており、期待どおりの成果が見込まれる
	B 当初目標に対して研究が遅れており、今後一層の努力が必要である
	C 当初目標より研究が遅れ、研究成果が見込まれないため、研究経費の減額又は研究の中止が適当である

(意見等)

連続的な聴覚信号からいかにして音韻が分節され、体制化されるのかを明らかにしようとする本研究は、基礎科学としてもまた音声認識等への応用面においても極めて大きな意義を持つ重要な研究である。

研究は着実に進展しており、特に音韻への分節に関しては優れた成果が挙げられており、高く評価できる。ただ、言語学に基づく最適性理論との融合によるモデル化への道筋は、現時点ではまだやや不明確に思われる。国際会議等における研究成果の公表に積極的に取り組んでいる点は評価できるが、連携研究者を含め9名のプロジェクトとしては、本研究計画と直接関連のないものも含めた現在までの査読論文数(25本)は特筆されるほどには至っていない。また、研究者間の連携も十分ではなく、それぞれに多様な成果を挙げつつも、それらが統合される見通しがやや心許ない。これらの諸点については、より一層の努力が必要である。

【平成24年度 検証結果】

検証結果	研究進捗評価で期待された統合的・融合的研究成果が十分に挙げられたとは言いがたいが、聴覚心理学的研究、聴覚言語学的研究における個別の研究には大変優れた成果があった。特に、聴覚の心理物理学的研究における錯覚的音を「知覚の再構成」の結果として考察した視点は、連続する音響信号を「離散的に要素に分けて」言語を構成する音素へと結びつけるものとなっている。また、音声の周波数分析から帯域特性と言語学的考察を関連づけている分析も興味深い。
A	本研究における聴覚研究と視覚研究の関連性については、今後の研究の進展に期待したい。